夢のただ中

活動写真弁士 片岡一郎（かたおか いちろう）

父が亡くなったとき、私はまだ20代後半であった。今の仕事で生計を立てるには至っておらず、アルバイトが主な収入源だった。それゆえ、父の友人と名乗る人物から「いつまでも夢を見ていないで、しっかりしなさい」と突然叱責されもした。

私の職業は、活動写真弁士である。

最盛期の1920年代後半には日本全国に約6800人を数え、収入において総理大臣を凌駕する者もいたという、まさに時代の花形職業が活動写真弁士であった。だが現在、私の同業者は日本に10人ほどしか存在せず、残念ながら儲かる仕事ともいえない。とあるテレビディレクターからは、何らの悪気もなく、「限界職種」と表現された。いつまで夢を見ているのだ、と十数年前の私が言われるのも無理からぬ状況であったのだ。

そもそも活動写真弁士とは何か？　音のない無声映画に、生で声を付ける大衆芸能の一種で、日本でのみ特異に発達した映画文化でもある。

そんな、ほぼ忘れ去られたといっても過言ではなかった活動写真弁士が、近年国際的に評価されつつある。

筆者はこれまで、18カ国から招かれ公演を行ってきた。今から110年も前に撮られた『忠臣蔵』をイタリアの映画祭で上映し、スタンディングオベーションを受けるなど、当時の、いや現代の日本人も含め誰が予想し得ただろうか。

映像に声を付けるという表現形態ゆえに、声優やナレーターとイメージが重複するが、活動写真弁士は個々にオリジナルの台本を製作し、本番に臨む点が大きく異なる。弁士が現代の観客に向けて紡いだ台本によって無声映画が上映されることで、演者と観客と作品、3者の間に共感という豊かな「繋がり」が発生する。

Essay 時の調べ

今、世界は思想的反発、経済格差、人種差別などの絶え間ない分断に苦悩している。コロナ禍による強いストレスもそうした傾向をより鮮明にした。けれど、いかなる状況であっても、人間は他者との繋がりなしでは生きられない。精神的充足は物質的充足よりも人を幸せにするとされている。私が世界中から招かれるのは、活動写真弁士が映画を媒介とし、声の表現を通じて、国境はおろか時代も易々と越え「繋がり」を感じさせる共感の芸術だからだろう。

実演風景

明治以降、日本国内での価値を失い、輸出用陶器の包み紙として乱雑に利用された浮世絵が、モネやゴッホらに見出され、ジャポニズムムーブメントへと発展し、世界的な評価を獲得した歴史はよく知られている。日本人が自ら無価値の烙印を押してしまった事物の中に、世界が求める文化が埋もれていたのだ。活動写真弁士もまた、浮世絵のように世界で発見されつつある、というのは牽強付会（けんきょうふかい）が過ぎる見方だろうか。

とはいえ周防正行監督『カツベン！』が一昨年に公開され、大河ドラマ『いだてん』の中でも活動写真弁士の登場シーンが設けられるなど、活動写真弁士の浸透度は年々高まってきている。まだまだ知られていないからこそ、次に何が出来るのかを模索し、自らの価値を新たに創出出来る、これこそ現代の活動写真弁士最大の魅力であるのかもしれない。

余談だが冒頭で触れた父の友人へは、メディアでの紹介や、海外公演などの晴れやかな活動があるたびに報告をし続けた。

「よくがんばっていますね。公演を見に行きたいので予定を教えてください」という返事が来るようになったのは、父の死から2年ほどしてからだ。我ながら青臭い行動だったと思うが、そうして意地を通したからこそ、私は今、夢のただ中にいる。

略歴

2002年2月、澤登翠に入門。これまでアメリカ、ドイツ、クロアチア、中国等、18カ国で公演。総演目数は350を超える。行定勲監督『春の雪』（2005）、大河ドラマ『いだてん』に出演の他、周防正行監督『カツベン！』（2019）では出演、時代考証、出演俳優への実技指導を担当。2016年に歌舞伎座出演を果たした。2020年に初の著書『活動写真弁史』（共和国）を刊行。